

I 看護実践能力向上への取り組み

1 OSCE

本学部では、臨床実習開始前に、模擬患者に対して看護実践を展開し評価を受ける、OSCE (Objective Structured Clinical Examination : 客観的臨床能力試験) を取り入れています。OSCEは、1970年代に英国の医学教育に取り入れたのを皮切りに、欧米、カナダへと広がり、1990年代には日本の医学教育の中でも試みられるようになりましたが、看護学教育に導入されたのは2000年以降であり、全国でも看護学教育への導入はまだ数少ないです。学生は、3年前期を通じてシミュレーター等を用いて、OSCEの課題について自己学習を繰り返すことにより、実践力が育成されていきます。OSCE終了後には、臨床実習への通行手形である「修了証」を授与して臨床実習に向けた宣誓を行う修了式を執り行い、皆で実習に向かう気持ちを高めあいます。



II 看護学部7領域の取り組み

II-1 基礎看護学

1 デモンストレーション動画を活用した「基礎看護技術論」

この科目では、大学で初めて「看護技術」を学習します。これから学ぶすべての看護技術のベースとなる、『知識・技術・態度』として、コミュニケーション・感染予防・療養環境調整・ボディメカニクス・看護師としての所作などを学習します。初めて看護技術を学ぶ学生が技術の根拠や留意点を理解し、正しく技術を習得できるようにデモンストレーション動画教材を作成しています。動画は天井からは俯瞰的に、また側面から看護師の動きの詳細を撮影し、e-learningで繰り返し視聴できるようにしています。

動画で技術を撮影するメリットは、自身の技術を繰り返し見直すことができ、振り返ることで技術の上達につながることもあります。

看護技術は反復練習で上達しますので、この科目を通して自己練習する習慣を身に付けてもらえるように工夫をしています。

例えば、自己練習を十分に行って技術試験を受けられるよう約1か月半の練習期間を設けています。自己練習には時々教員も参加し、演習では質問できなかったことなどに答えたり、実際に技術を見せて指導したりもしています。

従来の技術試験は試験官の眼前で、1人で実施する方法でしたが、学生の緊張感を軽減し、何度も納得するまでやり直せるように、動画でベッドメイキングを撮影し提出するようになっています。



基礎看護技術動画ホームページ



体位変換：上方水平移動の動画

2 基本の看護技術を学ぶ「日常生活援助技術論」

この科目では、看護師の業の一つである『療養上の世話』にあたるベーシックな看護技術を基礎看護技術論で得た知識・技術・態度を活用しながら修得していきます。

援助方法は患者さんの状況によって変化しますので、その変化に対応できる思考を身につけられるよう教授しています。紙上患者さんを設定しての援助の実施も、その教授方法の一つです。

学んだ技術は、学生個々が「虎の巻」としてまとめ上げていきます。この「虎の巻」は、病院実習の際にポケットに入れて持ち歩くことのできるポートフォリオです。学生はこの「虎の巻」を持って2年次の病院実習に向います。学生は、大学での学習が実題に繋がっている事を実感します。

また、毎回の講義終了後にはweb上での小テストを実施しています。この小テストは、過去の看護師国家試験問題をともに作成していますので、早期から、国家試験問題に慣れてもらうことはもちろん、今、学んでいる内容の全てが将来に繋がっている事を理解してもらうためにも役立っています。



3 最新の診療機材を用いて学ぶ「医療支援技術論」

看護師の業のもう一つである『診療の補助』として、看護の対象が診療を受けるための、感染予防、薬物療法、検査などの治療処置時の援助の修得を目指しています。

病院などの施設でも使用している酸素吸入器や吸引器、あるいは心電図モニターなどの機材を取り揃えて、臨場感あふれる技術演習を行います。また、多彩な学習支援の動画教材も配信しています。



- ①ゴムを左右に引き、患者の顔の上でクリップをとめる。
- ②クリップが患者の上唇外側になるようにし、内側の皮膚をはさまない。(ヒダは患者の左腕で採血する場合)
- ③はずすときは、クリップをゆっくり開く。



4 シミュレーターを多用した「ヘルスアセスメント論」

この科目では、患者様を全人的に観察する技術を習得していきます。

主には、血圧測定などのバイタルサインズ測定技術、聴診や触診などのフィジカルイグザミネーションなどです。

身体的な部分だけに着目して観察するのではなく、心理的・社会的側面からも患者さんを理解できるよう、知識・技術・態度を教授しています。

ヘルスアセスメントは、患者さんを理解し、個々に合わせた看護技術を行うためのベースとなる知識・技術です。

アセスメント力を習得するために、異常な心音や呼吸音などを聴取できるシミュレーターを多用したシミュレーション教育を実施しています。

シミュレーション教育

シムマンやラングといった高機能のシミュレーターを用いて、異常な心音や呼吸音を学習し、正常と逸脱の違いが分かる判断力を磨きます。



5 問題解決思考に支えられた「看護過程展開論」

看護実践において思考の基本となる看護過程の展開について理解することを目的としています。「問題解決思考と行動」の観点から理解し、実践できるように学びます。また、看護過程を支える様々な看護理論についても理解を深め、演習を通して学習します。

6 ワールドカフェとプレゼンテーションで学びをシェアする実習

1年次は、看護の役割と機能および患者の生活の場を理解することを目指して、まずは体験してみる(early exposure)実習を行っています。看護者としての自覚を促すとともに、学習への動機づけとなるよう支援しています。実習後にはワールドカフェで学びをシェアし、お互いを高めあう場を設けています。

2年次には、一人の患者さんを受け持ち、看護過程を用いて看護を展開し、基本的な知識・技術・態度を身につけ、これまでの学習を統合し、応用する実習をします。自己の課題を明確にし、看護者としての自覚と学習への動機づけとなるようにバックアップしています。終了後はグループワークとプレゼンテーションで学びを共有しています。



II-2 小児看護学

1 アクティブラーニングを取り入れた小児看護学援助演習

小児看護学援助演習では、学生は事前学習として取り組んだ課題ノートを参考に、技術の実施をとおして自分達で課題に対する解決案を創っていきます。実施した内容はグループワークで共有し、話し合いを通して新たな疑問や応用的課題を見いだしていくアクティブラーニングをします。そして、学生自身で工夫して課題に取り組みながら、効果的方法・解決策を見いだしていきます。

小児看護学は身体測定一つ取っても、小児ならではの方法や、特異な状況が幅広いため、様々な状況に合わせて援助の方法を創出する力が求められます。自分たちで考え、状況に見合った援助を導き出す学習は、学生にとって決して容易ではありませんが、学生たちは「難しいけど楽しい」という知的好奇心を持ちながら学習しています。

実習室がリニューアルされたことで、十分なスペースが確保できるようになり備品も充実しました。それにより、よりきめ細かい授業展開が可能となり、学生も活き活きと学んでいます。



II-3 母性看護学

1 千代田区における母子保健向上のための「妊婦サロン」の運営

平成29年4月より、看護学部教員である助産師と看護学生が中心となって、妊婦が快適なマタニティライフを過ごし、心身共に良好な状態で出産の準備を行い、親子が健やかな生活をできることを目指した「妊婦サロン」の運営を千代田区の助成を受けて行っています。

学生は看護学部3年生後期～4年生前期にかけて履修する母性看護学実習の一環として、母性看護学援助演習（看護学部3年生前期科目）で修得した看護技術を用いて、妊婦の診察、育児技術の提供を行います。妊婦との交流を通して、妊娠期の女性の理解を深めています。



2 4年生が3年生へ母性看護技術提供を指導する「ピアエデュケーション」

学生は学内演習により、妊婦・褥婦の腹部モデルや新生児モデルを使用した妊婦・褥婦・新生児の観察や各時期に必要な看護技術を習得後、臨床現場で受持ち対象の母子や妊婦サロンでの妊婦へ看護を実践します。平成30年度の母性看護学演習では、すでに履修を終えた4年生が3年生に母性看護技術を教授する「ピアエデュケーション」を試み、教える側、教わる側、双方の効果について検証しています。



II-4 成人看護学

1 成人看護学の概要

成人看護学領域は、患者さんの身体が病気やその治療で急激に悪化したり、回復したりする時期の急性期・回復期ケア、病気が慢性的な経過を辿り、死を迎える時期の慢性期・終末期ケアに、大きく分かれます。

2 シミュレーション演習で学ぶ周術期看護

急性期・回復期ケアでは、手術を受ける患者の看護や病気や交通事故などで障害を受けた患者のリハビリテーション看護について学習します。成人看護学援助論Iで手術を受ける患者の事例を用いた看護過程の展開を学習し、同じ事例を用いて援助演習では術後の患者の観察や酸素療法、輸液療法、疼痛緩和などの看護技術について学習しています。また、感染管理専門看護師より、臨床現場における周術期患者に対する感染予防の実際を講義していただき、実践的な看護が学べるようにしています。



3 腎臓病食の試食や患者・家族の役を演じて学ぶ授業

慢性期・終末期ケアでは、学内の授業を通して、病気で闘病中の患者さんの気持ちを体験し、そのケアを患者さんの立場から考えるために、腎不全の患者さんの食事を試食したり、身体の観察や生活指導を受ける患者さんや家族の役を演じたりしています。また、臨地実習の最終日には、異なる実習施設の学生が一同に介して、患者さんのケアについて発表し、実習で行ったケアが科学的な根拠に基づいた個別的なケアであったのかを考える機会を持っています。これらの体験を通して、学生たちは患者の気持ちや生活を尊重した看護を学習していきます。

93



II-5 高齢者看護学

1 高齢者看護学実習 I での巣鴨地藏通り商店街探索

看護学部3年生が、高齢者看護学実習 I の一環として、巣鴨地藏通り商店街の探索を行いました。この実習では、「赤いパンツ」「グルメ」「信仰」など、グループごとの学習課題に即して地域の探索や街の人へのインタビューを行い、「高齢者が暮らしやすいまち」が持っている要素について学びます。写真は、「信仰」の課題に取り組む学生の様子です。



この実習では、別日に行われた認知症サポーター養成講座体験受講や通所施設実習を通して、地域包括ケアへの理解を深める機会となりました。

94

2 認知症サポーター養成講座の体験受講

看護学部3年生が、高齢者看護学実習 I の一環として、認知症サポーター養成講座を受講しました。当日は、千代田区高齢者総合サポートセンターの相談員の皆さまが講師をとめてくださいました。



講義に続き、教材DVDのコンビニエンスストアでの対応場面を視聴し、買い物に来た認知症の方が何に困り、店員にはどのような対応が求められるのかを、グループで話し合い、共有しました。最後に、講師の方から受講者全員に、サポーターの証であるオレンジリングが手渡されました。

95

II-6 精神看護学

1 精神障がい者の当事者による「病気の体験」の語りから学ぶ特別講義

「精神看護学概論」では、精神障害の当事者の「病気の体験」を何う体験授業を実践しています。

看護学部2年生前期の「精神看護学概論」の授業では、精神障害の当事者の方々をゲストスピーカーとしてお招きし、「病気の体験」や、「当事者からみた精神医療」についてお話していただきました。

2018は、3名の当事者の方々にお越しいただきました。当事者の方々が医師から告げられた病名は、統合失調症や気分障害（うつ病）などですが、当事者の方たちは、ご自分がなぜ病気になってしまったのか、過去においてどのような病状であったのかを自己分析し、どのように病気を受容し、病気と付き合っているかなど、分かりやすくお話していただきました。学生たちは、精神疾患をより身近に感じる事ができ、さらに辛い体験を乗り越えて当事者の方たちが病気を受容し、病気と上手く付き合っていることを知ることで、看護学生として当事者に対する精神疾患のケアの方法を学ぶことができました。



96

II-7 地域・在宅看護学

1 時代のニーズに応える地域・在宅看護学教育

近年保健医療システムは「入院」から「在宅（地域）」中心へと大きく舵を切り、看護師教育においても、「生活する人々」を対象とし、「生活の場」で行う看護を学ぶ重要性が高まっています。本学では、「地域看護」と「在宅看護」を連動させながら学修するプログラムを展開していることにより、様々な専門職種、機関のみならず、生活する人々自身と協働して、生活の場（地域・在宅・産業・学校）に必要な資源を生み出したり、調整を行ったりしながら、生活する人々の心身の状態を向上させ、よりよく生きる助けとなるための支援方法について、効果的に学ぶことができます。実習においても、在宅看護（訪問看護ステーション）と地域看護（地域包括支援センター）の両要素を取り入れて、地域で働く看護職として、また地域と連携して働く病院看護師として不可欠な考え方・スキルが取得できる教育プログラムを構成しています。



2 豊富なアクティブラーニングと実践家による講義

講義では、学修者主体のグループワークや課題解決型演習を豊富に取り入れ、知識の修得に留まらず、看護実践に不可欠な、コミュニケーション能力、協調性、リーダーシップ、思考力等の基礎的能力も同時に育成するプログラムを展開しています。

また、地域看護や在宅看護の第一線で活躍する看護師から実践活動についてご紹介いただく講義を効果的に取り入れることにより、授業で学修した理論や方法論と実践のつながりへの理解を深めるとともに、素晴らしい実践に感銘を受け、学修意欲を高める機会としています。



3 最先端の在宅医療機器を用いた医療機器管理演習

医療的ケアを必要としながら自宅で療養する患者さんの急増に対応し、在宅療養者を支える医療機器も日進月歩の勢いで進歩しています。このため、在宅医療機器メーカーから最先端の医療機器の提供を受け、医療機器の使用・管理方法を学んだり、また在宅療養者の自宅を模した在宅演習室において、学生自身が在宅療養者の立場で医療機器を使用してみて、療養者や介護を行う家族の身体的、心理的、社会的状況について考える演習を行っています。これらの体験を通じて、学生は在宅療養者とその家族に必要な支援について理解を深めていきます。



4 地域連携を基盤とする地域看護診断演習

千代田区並びに区内の関係機関との地域連携のもと、千代田区住民の健康課題と支援策を検討する地域看護診断演習を行っています。演習では、学生自身で対象地区を歩き、暮らしやすさや健康に関わる町の状況を確認したり、社会福祉協議会、地域包括支援センター、児童館の職員、並びに住民の方々にインタビューを行ったりします。学修成果については、千代田区の関係者もお招きした報告会でプレゼンテーションを行います。

これらの学修を通じて、学生は、現代の保健医療福祉制度の中で必須となる地域看護の最新の知識と技術を習得していくこととともに、健康な人々に対する看護の役割について理解を深め、住民・多職種多機関との連携に必要な態度を身につけていくことができます。



5 学校・産業保健活動の実践現場体験

学校や産業の場で働く看護職への興味関心が高い学生を対象とした選択科目の中で、共立女子中学高等学校と、千代田区や中央区の企業での学外演習を行っています。この学校・産業保健活動の実践現場での学修は、養護教諭や産業看護職の活動と学校保健システムや企業の健康経営について、実践的に理解を深める目的で行われます。さらにこの体験は、病院に入院している患者さんの入院前後の生活の理解につながり、病棟での退院支援にも生かされていきます。加えて学生にとっては、病棟経験を経て学校・産業保健の場で活躍する看護職の先輩方の姿に自身の将来を重ね、キャリア形成について考える貴重な経験ともなっているようです。



Ⅲ 学生生活・キャリア支援・国家試験対策

1 新入生歓迎交流会

看護学部は毎年4月のオリエンテーション週間に、2年生全員がBig Sisterとして新入生を迎える『新入生歓迎交流会』を開催しています。ここ数年は1年生も全員出席しており、履修のしかた、学生生活のこと、サークルやアルバイトのことなどを2年生から直接話を聞くことで、「これからがんばろう!」という気持ちを持てる機会になっているようです。



2 3年生対象キャリア支援（前期）

2年から3年に進級する3月末のオリエンテーション期間に、看護職としてのキャリアアップを考えることを目的に開催しています。

本学の教員が講師となり、保健師・助産師・養護教諭の仕事や資格取得の方法、認定看護師・専門看護師・大学院進学についての講演をしました。また、助産師、養護教諭については、看護学部卒業生の取り組みの状況なども紹介しています。

3 総合技術演習（OSCE）Ⅰ修了式の開催

3年生では、3年後期から始まる領域別臨地実習に臨むために、「総合技術演習Ⅰ」において客観的臨床能力試験（OSCE）に合格しなければなりません。2018年度は、3年生84名が試験に合格し、学部長より、合格証書と徽章が手渡されました。また、担任長、模擬患者役としてご協力頂いた本学事務職員の方々からは、激励の言葉を頂き、最後に、代表学生が領域別臨地実習に臨む決意を宣誓しました。



104

4 3年生対象キャリア支援（後期）

本学卒業生を中心とした先輩看護師4名を招聘して、「先輩看護師から学ぶ就職活動の進め方」というテーマでキャリア支援プログラムを開催しています。本プログラムは2部構成とし、第1部では、4名から就職活動の進め方や国家試験対策について体験談を話してもらい、第2部では、会場を移して、先輩看護師と3年生が交流できる会を設けました。そこでは、国家試験対策の取り組み方法、就職活動の要点、現在の働き方など、大学OGだからこそ、先輩方に多くの質問を率直にすることができ、終始和やかな会となりました。



5 さくら通信（「とびだせ！ Kyoritsuナース -学生委員会さくら通信-」）の発行

東京都千代田区という「地の利」を生かし、学外で開催される医療・看護系の催しを学生に案内し、視野を広げてもらうという趣旨で2015年度からスタートした看護学部学生委員会が刊行する通信です。2017年度からは、講演会・セミナー・イベント等の案内のみでなく、学生委員会において開催した行事の紹介、学生への連絡事項も記事もまとめ、年4回程度定期刊行となっています。

6 ポスター掲示による看護研究発表会

3年生では、看護研究の種類や方法、文献検索などを学びます。4年生では、約1年かけて自分の興味・関心のあるテーマについて、色々な研究方法で研究を進め、看護研究論文としてまとめ上げ、最後に、ポスター掲示による「看護研究発表会」を行いました。

学生たちは、看護研究のプロセスを学び、やや緊張しながらも堂々と立派に発表していました。就職後、臨床現場でも看護の質向上のために、積極的に研究に取り組んでくれることでしょう。



7 国家試験対策

1年生から模擬試験などを実施し、その結果を基にして、クラス担任と連携してきめ細かい指導を実施している。学生自身がWebの国家試験問題に取り組むことができるようにさまざまなツールを活用して学習できるように支援をしています。

また、教員は学生個人のレベルに応じた学習指導や生活面を含めたきめ細かい指導をしています。

8 すずらん祭りへの参加

2015年から、神田すずらん通り商店街において開催される「本の街 神田すずらんまつり」の共立女子大学ブースに、『カラダの中の酸素はどれくらい？測ってみよう酸素飽和度』と題したコーナーを開設しています。2018年は、看護学部3年生のボランティア9名が参加しました。最初は緊張していた学生も徐々にリラックスし、ブースを訪れた観光客の方々の測定を行い、測定値の見方を説明していました。このように地域商店街の活動にも参加しています。



IV 教育推進のための取り組み

1 実習運営合同会議の開催

本学は、附属病院を持っていません。看護学実習を円滑に進めるには、実習を受け入れてくださる医療機関をはじめとする多くの施設との密な情報交換が欠かせません。そこで、実習施設と学部が連携し、臨地実習における教育効果や問題について共有・協議することにより、教育体制の充実と実習教育の向上を図ることを目的に、年に1度、「実習運営合同会議」を開催しています。

平成29年度2月に開催し、日下学部長による「臨地実習の現状と課題について」のミニ講義の後、各領域に分かれて実習の成果、運用上の課題、今後の改善点などについて意見交換を行いました。

2 共立看護学雑誌の発行と看護学研究会の開催

教員の教育実践や研究活動への示唆を与え合うことを目的として、雑誌「共立女子大学看護学雑誌」を年に1回、毎年3月に発行しています。

